

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370084

研究課題名(和文) 主客未分の体験を現代芸術の造形に照らして相互ケアの論理へと再編成するための研究

研究課題名(英文) A Study on the Merger Experience between the Subject and the Object That Can Be Reorganized into a Logic of Mutual Care in the Light of Contemporary Expression of Art

研究代表者

新宮 一成 (Shingu, Kazushige)

京都大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20144404

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：主客未分の体験という概念は、人間に与えられた無条件の相互理解の場を指して肯定的に用いられるが、他者の住まう空間を自己もまた分有するというこの考えの中には、明らかに不合理なものが含まれている。この研究では、主客未分という概念によって示されていることがらを「寸断された身体」をはじめとする精神分析の概念によって練り直し、人間が幼児期に経験する自己身体との間の不協和の体験が、人間相互の身体が混じり合うような不合理な感じ方をも可能にしていると考えた。この可能性を現代芸術の造形原理の中で体験することを通じて、人間の相互ケアにおいても互いの身体を自他未分化の水準で捉える実践を開き得ることを見出した。

研究成果の概要(英文)：The concept of merger experience between the subject and the object has been used in a positive way, although it contains a manifest irrationality by implying the idea that the self can participate in the corporeal space of the other. This study tried to transcend this irrationality by elaborating this concept through psychoanalytic theories including the "fragmented body". The infantile experience of the discordance with one's own bodily reality enables us to integrate the irrational merger experience between the self and the other. Contemporary expression of art offers us occasions of discovering the logic of merger between human bodies, and thus opens a space of practice of care that grasps mutual corporeal experience on the level of undifferentiated self and other.

研究分野：精神医学、精神分析

キーワード：主客未分 現象学 寸断された身体 精神分析 現代美術 リトラル リハビリテーション ケア

1. 研究開始当初の背景

(1)主客未分という考え方は、人間に備わる交流の可能性を表すものとしてしばしば現象学の文脈に登場してきていた。そこでは原初的な融合形態が思念されて、個としての孤独を包み込む集合的な和合の可能性が示唆されてきたのである。ところがこの考えの中には、人が別の人の固有の空間の中に入り込むという不合理な観念が含まれており、概念全体が一つの幻想としての質を持つことも認めざるを得ない。

(2)しかしながら他方では、人間の社会生活の日常的な感じ方として、人の身になってみるという表現があつて、それが実際に有効に機能していることも確かである。なかんずく、人の世話をしたり、ケアに携わったりする際に、どのような姿勢が互いに有益な交流を生むのかを決めるためにこのような機能は欠かせないものである。すなわち、主客未分という観念はこのような矛盾を抱え込んだまま現実的には成立しており、そうすると、この概念の指し示すところは実際どのようなものであるのかをさらに綿密に探究することによって、それを相互ケアの論理として練り上げる可能性があることになる。

(3)なかんずくこの観念はしばしば芸術作品を参照しつつ語られることが多く、芸術の制作過程において働く論理性は、主客未分の位相を感覚的に把握できるような形で示しているものであることが示唆される。現代芸術には矛盾を孕んだ概念をその矛盾のままに提示してかえってその概念の生産力を活性化させる作品が多くある。その中に含まれている主客未分の姿を感覚することによって、上記の矛盾を力に変えながら活用することへの道が開かれるのではないかと考えられた。

2. 研究の目的

(1)主客未分という言葉の持つ一体的な響きは、ともすれば人間と人間との間の融合や和合を前提として理想化する傾向を生みがちであったが、そうした理想化をひとまず括弧に入れて、この言葉を概念として掘り下げ構築することを、この研究ではまず初めに目的とする。主客未分の概念の指し示すものの経験論的な根拠を明らかにし、概念の内部での論理的な整合性を探究する。

(2)上記によって再構築された主客未分の概念を、現代芸術の造形の論理に照らし合わせて、人間の感覚の現実と根差した形で、この概念の有効性を確認する。とりわけ実際のケアの現場において人と人との交流の中でこの概念が如何なる形をとって力を発揮することができるのかを探究し、この概念の現実的再構築を行う。

3. 研究の方法

(1)主客未分の概念は上記のように矛盾を孕みながらも現象学的文脈では積極的に語

られてきた歴史がある。一方、思想的な同時代性を持っている精神分析においては、同一化という概念があつて、これもある人間主体が他の人間主体と同じものであるとして自らの存在を感じ取ることを指す。そしてこの同一化に関しては、精神分析治療の具体的場面でたびたび運用されてきている。すなわち、精神分析の同一化概念は、現象学の主客未分の概念と同様に、ある人間主体が他の人間主体の固有の空間において重なり合うという不合理な観念を孕みながら、有効に運用されてきたことになる。

このような精神分析の同一化概念は、臨床的な検証がたびたび行われているものであるので、たとえ主として無意識の水準においてであれ、人間主体の精神の働きとして現実に作動している心の動きを指し示している。また、この同一化の概念は、発達の見地から、経験論的な基礎を持つことが見出されている。すなわち乳幼児による親との同一化を論じたメラニー・クラインの理論や、やはり乳幼児による社会的な自己像への同一化を論じたラカンの鏡像段階論は、臨床的な事象をよく説明している。とりわけ後者においては、同一化に当たっていわばその裏面とも言える、自己身体の寸断化のイメージが発生することが指摘されている。

このような現象学と精神分析の理論的対応関係を活用して、本研究では、主客未分の概念を精神分析の概念を用いて基礎づけ直し、その経験論的基礎を整えることとする。

(2)上記の主客未分の基礎づけを行うにあたり、活用される精神分析の理論はいずれも乳幼児期の発達論的な精神世界と、臨床的に表出される無意識の世界の連続性に基礎を置いている。したがって主客未分の概念の感覚的具体化を図るために、現代芸術の制作過程を研究に導入する。主客未分の概念の背景として、自己と他者、外と内などの対立的な概念がどのように感覚的な水準で絡み合うのかを考え、造形によってその考察を呈示するという方法をとる。現代芸術を専門とする共同研究者との共同作業により、この考察を作品として実現する。そしてその作品と共に、主客未分の概念によって示される自他の構造的関係を思索する。

(3)臨床におけるケアの実践の中に主客未分の現象学的概念を導入し、ケアされる人とケアする人の間に主客未分の次元が示現することを観察し、その次元がどのような言語的表現や動作的表出を伴って表現されるのかを捉える。これにより主客未分の次元の具体的構造と機能様式を明らかにする。

4. 研究成果

精神分析的な同一化の概念からは、人と人との間で主客未分の境位が発現するときには、人と人との和合が実現しているという楽観的な見通しを立てることはできるとは限らず、むしろ病理的な表出が起こるという可

能性を考慮に入れなければならない。それは、主客が未分化であることによって、主体の確立不全の状況が到来し、そこから基本的な能動性の障害や、他者により自己が圧倒されるなどの事態が帰結することがあり得るからである。こうしたことは一般的な主客未分の概念からは導出されないのであるが、精神分析のように言語構造の中で主体の能動性や受動性を考えてゆく理論体系においては、論理的帰結の一部である。

しかしこのような病理的な帰結を視野に入れておいて初めて、主客未分の境位の構造と機能が全体的に開示されてくる。すなわち、人が言語を用いて、とりわけその主語の働きを主体化するようになって、次第に成人に近づいてくるといふ発達の事実を考慮に入れるとき、主客未分の領域は、幼年期にその主体化がまだ十分でなかったときの状態を含めた歴史性の中で捉えられなければならないのである。

人の主体性の発達において、能動性の極が自己意識と重なってくることによって、人の内面が形成されてくる。その中で、言語の網の目によって構成されている社会構造の中での自己の位置づけが定まって行く。その際に、自己の身体を把握して自己が社会化されてゆくに当たって、鏡像段階はその一里塚である。社会の中で自分がどのように見られているのかを、鏡の中に映る自己像と社会関係を込みにして、子どもの精神は把握する。これによって社会的な纏まりのある自己像が形成される。

そしてそれと並んで、子どもはそれまでの純粋な身体存在を、他者の語らいを受けていただけの寄る辺ない存在としての、纏まりのないものとして把握する。この存在に関しては自己身体との関係を能動的に統御する力を欠いているものであると考えられ、この存在に基づいた自己イメージは、「寸断された身体」となる。身体各部は協調性を欠いており、ばらばらに経験される。

このような纏まりの無さは、主客未分の境位という点からみると、むしろ積極的に働くように思われる。すなわち、いわゆる自己所属性にこだわることなく、感覚や思考を経験することが、必ずしも不合理として排除されないからである。たとえ、融合や和合という境地にまでは至らずに混乱を呈するとしても、そこに主体と客体とが交替する構造が生じ、結果として大きく見れば主客未分の次元が開かれることになることと見ることができよう。

すなわち、一つのことがらを裏と表とから観たり、受動と能動で表現したりするという対立項の交替可能性の領域が、精神活動の一部に設定され残存することが示唆される。またこうした領域は、発達途上の感覚や概念体系の中での一定の位置づけを占めるものであるから、最低限の構造的安定性を獲得することにもなるであろう。このように対立する

体験様式を一つに纏めたかのような対象関係が心の中に出来る時、その対象は、自己とも言えまた他者とも言える同一化を構成することになる。

この同一化は普段の安定的に主体化された日常生活では不安な要素に分類されるであろう。しかしやや日常からずれた局面、すなわちここで考察している芸術制作の過程や、病の場合をはじめとするケアの場面では、この同一化を介して主客未分の境位が開けることによって、むしろ必要な交流が行われることがあり得ると考えられる。

主客未分の境位が論じられる場合、現象学でよく述べられてきたのは、人間の皮膚接触の感覚が、触れる主体と触れられる主体との間での宙ぶりの状態を構成しようということであった。こうした感覚をもし造形で現実化するとすれば、それは表から観たものと裏から観たものが重なり合うような、膜の上に展開される領域であるだろう。その領域それ自体は実在ではなく、何かと何かの間の差異として認識されるに過ぎないが、そこに映し出される、自己と他者、内と外、あるいは純粋な存在と知的活動との対立が形作る文様が、そのまま人間にとって必要な交流のあり方を作り出していると言える。

こうした観点から、「リトラル」の造形を企画し、展示として実現した。「リトラル」は「沿岸地帯」という意味である。作品では、陸と海の間のもどちらでもない領域において想定される液体の動的な形態に、主客未分の概念の機能状態がイメージされた。

また、「寸断された身体」の造形に関して、幼児期の鏡像段階がその中心であることに鑑み、闇の中に四肢の断片や目の映像が明滅するという空間を経験する展示を行った。

精神分析を用いた考察とこれらの展示から、纏まりある自己像と寸断された自己像の間の対立、主体と客体の対立、裏と表の隔たり、などの両面的な価値のせめぎあいから生まれる運動のモメントが、主客未分の境位の心理的な意味を構成していると思われた。そしてこの領域では、人の立場に身を置くということによって進む人的交流が促進される可能性があることから、この領域の病理的な表出を抑制しながらこれをケアの分野でも活用することを目指した。

失語と麻痺を患う人のリハビリテーションにおいて、施術を受ける人と施術を行う人との間における運動の重なり合いという点に、主客未分の境位の表れを感知することができる。すなわち、間身体的に主客未分の概念を捉え、身体のコババリなどの表出を、身体的な現実の相互的な重なりとして捉えるのである。それによって捉えることができたのは、施術者は被施術者の側からの、リハビリをやりたくないという消極性と、リハビリで意外な展開が身体に生じるといふ期待との、両面的な気持ちを持ち合わせており、その両面的な対立を縫って、リハビリの実践が

行われているということであった。

人と人との交流においては、主客未分という両価的な境位が活動し、現在の葛藤的な状況をいったん過去の寸断された身体や社会との同一化へと送り返し、そこから新たな運動を始めるというメカニズムが働いていることを確認することができた。主客未分という概念に着目しておくことによって、このメカニズムを促進させることが可能になると思われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

新宮一成：精神病理学において精神療法的に考えるということ。臨床精神病理 34；287-295, 2013. (論文)

Kazushige Shingu: Living with the Impossible through the Letter. *Rivista di Psicologia Clinica*, 8; 66-71, 2013. (論文)

新宮一成：日本的な文化にラカンが見た精神医学的可能性について。第 17 回日本精神医学史学会。東京慈恵会医科大学, 2013 年 11 月 10 日. (学会発表)

新宮一成：個と歴史—無意識と夢における—。奈良・町家の芸術祭 HANARART 2013, 桜井本町たまり場. (講演)

新宮一成：日本の文字と無意識の実践。精神分析&人間存在分析, 22; 29-38, 2014. (論文)

主客未分の体験を現代芸術の造形に照らして相互ケアの論理へと再編成するための研究プロジェクトチーム表現部会：リトラル。アートスペース虹 (京都市東山区), 2015 年 2 月 10-15 日. (美術展示)

稲垣論：哲学は経験の事故にどのようにかわるのか？京都大学人間・環境学研究科地下講義室, 2014 年 8 月 30 日. (講演会)

新宮一成：夢について。學士會会報, 通巻 912 号; 75-78, 2015. (論文)

新宮一成：精神医学の歴史における精神分析—働き続ける痕跡として—。精神医学史研究, 19 (1); 5-10, 2015. (論文)

Kazushige Shingu: Transference of Creation: Freudian Bipolarity of Creating and Being Created. *Comparative Literature Association of the Republic of China, Newsletter*, No. 14, 2015. (論文)

新宮一成：精神病理学における脳的なもの。臨床精神病理, 36(2); 183-192, 2015. (論文)

新宮一成：「ちいさな幻覚」について。精神分析&人間存在分析, 23; 13-20, 2015. (論文)

Kazushige Shingu: Delusional Causality in Transference Formation. The 13th Annual Conference of Affiliated Psychoanalytic Workgroups, Ghent University, Belgium, 2015 年 8 月 22 日. (国際学会、招待講演)

新宮一成：造形と精神分析。第 25 回日本描画テスト・描画療法学会, 2015 年 9 月 5 日. (学会招待講演)

Kazushige Shingu: Réflexions sur les Points de Fixation: Là où Vivent la Psyché, et le Soma. Colloque Médical franco-japonais. La Maison franco-japonaise de Tokyo, 2015 年 10 月 24 日. (学会発表)

主客未分の体験を現代芸術の造形に照らして相互ケアの論理へと再編成するための研究プロジェクトチーム表現部会：展示会「遠鳴り」ならびに講演会「物と形象」。アートスペース虹 (京都市東山区), 2016 年 2 月 23-28 日. (美術展示)

佐藤泰子：発話不能者への作業療法における現象学的アプローチ—間身体的主客未分の体験から作業療法士の患者理解を捉える—。ヒューマン・ケア研究, 16(2)：未定, 2016. (論文、印刷中)

Akiko Okada: Émergence du Corps Morcelé dans les Mythes Japonais. *Psy Cause*, 70; (未定), 2016. (論文、印刷中)

Kazushige Shingu: Le Rêve et les Points de Fixation dans la Psychosomatique. *Psy Cause*, 70; (未定), 2016. (論文、印刷中)

[雑誌論文] (計 11 件)

[学会発表] (計 8 件) (美術展示、講演含む)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

新宮研究室 <http://priborwien.net/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新宮 一成 (SHINGU Kazushige)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号： 20144404

(2) 研究分担者

大橋 勝 (OHASHI Masaru)
大阪芸術大学・芸術学部・講師
研究者番号： 90213834

(3) 連携研究者

()

研究者番号：